

第6章 入学関連のグローバル化に関する実績

6.1 取り組みの概要

本章では、入学関連のグローバル化の取り組みについての実績について、入学グローバル化PTが報告する。入学関連のグローバル化について、本事業の構想調書では、入学から卒業までの学生データの一元化、高大接続FD等について記述されており、本章ではこの部分についての実績を報告する。

6.2 現状と成果

6.2.1 外国語学部の改組に連動した入試制度改革の検討

改組された外国語学部の新たなカリキュラムが、平成26年度より施行される。それとともに、平成25年度には、同学部の学生を募集する英語1科目型入試（以下「本入試」とよぶ）について、入学試験委員会（平成25年4月22日）、部局長会（同年5月8日）、理事会（同年5月30日）の承認を経て導入が決定された。その後、入学希望者の募集を経て、同入試が実施された（平成26年1月26日）。

外国語学部では入学者受け入れの方針において次のように謳っている。

「外国語学部は、多様な言語とその関連領域、および国際関係に関わる教育を行うことにより、京都産業大学の建学の精神に適う人材を育成することをその教育の目的としている。とりわけ、言語についての体系的理解を基礎とした実践的な言語運用能力を習得し異文化理解および国際社会の今日的課題に対する理解を深めることにより、日本国内に限らず国際社会においても信頼され活躍できる人材を育成しようとしている。」

このような方針に則りつつ、外国語学部の新たなカリキュラムでは、「専攻言語科目の質と量を維持しながらも、英語を全学科の副専攻と位置づけ、高度な英語力を習得する」ことを企図している。これらを踏まえつつ、本入試においては、次のようにその趣旨を明らかにするに至っている。「この制度は、マーク式の試験に加えて多様なテーマ（社会・自然科学領域等）に関する論述式の英語の試験を実施することにより、総合的、論理的思考力や高度な英語力を備えた優秀な学生を受け入れ、学部内の活性化を図ろうとするものです。」

本学では、多くの入試形態が全学部共通の方式でおこなわれており、そのため従来は、AO入試をのぞき、学部各々の教育課程の個性を入試に反映させることが容易ではなかった。このような中、外国語学部の取り組みは、ポリシーに則りつつ、入試から教育課程までのつながりを意識したものであり、本学の現状に照らして画期的な意義がある。

6.2.2 京都産業大学附属高校での英語教員研修の実施の検討

共通教育英語担当教員との意見交換をおこなった結果、現状では、ただちに京都産業大学附属高校（以下「本附属高校」とよぶ）での英語教員研修といったFD活動を実施することは困難であることが明らかになった。平成25年度より共通教育のカリキュラムが全面的に刷新され、英語教育についても新しい仕組みが動きだしている。そこでは、「より実用的な英語能力を向上させる学習手段として、TOEIC対応の学習内容を授業に組み込んで」おり、これは本

学としてはまったく新たな試みである。英語担当の教員は当面、このような新しい教育課程の実施運営にかかりきりにならざるをえない状況にある。

他方、同じ意見交換を通じて、本附属高校出身の本学学生の英語の成績について、共通教育推進機構においては特段の追跡調査等を実施していないことが明らかになった。そこで、本 PT としては、課題の英語教員研修を実施するための環境整備の一環として、附属高校出身の本学学生の英語の成績について、本学入学以後の追跡調査をまずは実施することとした。そのため、入学 PT と共通教育推進機構とで協議の上、共同で成績データの分析・検討をおこなうことを計画している。その際、入学 PT より共通教育推進機構に対し、分析に必要なデータの開示の希望を伝えた。

なお、これに関連して、入学 PT では予備作業として、本学において実施されている英語関連の試験等について調査をおこなった。

6.2.3 入学時から卒業時までの学生情報の一元化の検討

本課題につき、入学グローバル化 PT での調査・検討の結果、システム上は、一元的なデータ管理・運営体制が実現されていることが明らかになった。一方で、そのような一元的データを用いた、部局横断のデータ分析を円滑に実施する体制の実現は未だなされておらず、今後の検討が必要である。

学生に対する学習指導に関連しては、教学センターでは「学びのポートフォリオ」の運用をおこなってきた。これまでは、関連部局の職員のみがデータにアクセスし得たが、平成 25 年度から、全教員がアクセスすることが可能となる仕組みが整えられた。

この「学びのポートフォリオ」には、個々の学生に関する基本情報に加え、学業成績および履修履歴、入試種別、進路、等々の当該学生に関わるデータが集約されている。従来はこれらのデータには、職員がアクセスし、学修指導や生活指導に活用してきた。今後は、従来以上にきめ細かな学修指導等が可能になると考えられる。

他方、このような個々の学生に対する指導とは別に、マスの動向を統計的に把握することもまた、教学改革には欠かせない。

この点に関連して、現在、本学でもいわゆる教学 IR に対する需要が高まっており、これを整えることが喫緊の課題となっている。そこで、かかる必要性とデータの一元化という本課題を結びつけて考え、「教学 IR」の体制を整えることにより当課題の具体化をいっそうおし進める、という方策を現在検討している。そのため、この課題をあらためて全学的な課題としてとらえ、教学 IR 担当部署設置を目指して準備をおこなっているところである。

なお、本 PT では、かかる準備の一環として、教学 IR に基づく教学改革について先進事例の調査をもおこない、情報共有をおこなった。

6.2.4 カリキュラムと一貫性のある入学前教育の検討

本学で現在おこなわれている入学前教育については、まず、全学共通で実施されているものと、学部毎に実施されているものがある。

全学共通のものは、「英語 e-learning」と称されるもので、教学センターが実施している。これは、パソコンを使用した e-learning であり、個々の入学予定者が、事前テスト、診断テストを経て、各レベル別の STEP に分かれて学習をしてゆくものである。これについては、個々の

学生について、入学前の学習状況と入学後の成長との相関関係の有無については明確な結論を得られてはいない。

各学部で実施している部分についても情報収集をおこなった。その結果、各学部でそれぞれの分野に応じた工夫がみられる一方で、入学前教育を実施していない学部もあることも判明した。これらの入学前教育について、個々の詳しい実態を把握するため、調査することを検討している。

6.3 まとめ

本章では、入学グローバル化 PT より、入学関連のグローバル化に関する取り組みの成果について述べた。本 PT の主な成果は、次の通りであった。

1. 外国語学部の改組に連動した入試制度改革の検討（6.2.1 に記述）
2. 京都産業大学附属高校での英語教員研修の実施の検討（6.2.2 に記述）
3. 入学時から卒業時までの学生情報の一元化の検討（6.2.3 に記述）
4. カリキュラムと一貫性のある入学前教育の検討（6.2.4 に記述）

今後も、これらの施策について、継続的に取り組んで行く。

